



寄稿

## 「文房四宝」—— 其の二「硯」編

せき いずる  
関出

筆・硯・墨・紙の中で、硯は墨を水で磨り下ろす用具(墨磨り・墨研)として、自然石や焼成陶磁などで作られ、数は「面」で数えられます。硯の良否は、墨の下りや発墨の具合による妙味が評価されています。

中国では、端溪硯、歙州硯、洮河緑石硯、澄泥硯などに、良硯としての定評があり、産地、材質、形式に加えて、彫刻などの意匠性にも格別な趣向が凝らされています。

日本の硯材(産地)には、赤間石(山口県)、雄勝石(宮城県)、那智黒石(三重県)、雨畑石(山梨県)などが比較的に知られています。

中国でも日本においても、硯用原石の採掘坑には盛衰が見られ、現代社会では、硯の需給に関する規模は極めて縮小し、実用、鑑賞、骨董的にも珍重される硯は、およ

そ限られます。

日本では、弥生時代から硯の使用自体はあり、飛鳥時代の遺跡からは陶製で円面硯が多く出土しています。その他、須恵器の食器などを硯として転用したものもみられます。奈良時代には律令国家としての書類に、木簡や紙などへ漢字で記す文字社会となり、平城京出土の陶硯には、円形硯、宝珠硯、風字硯、形象硯(羊、亀、鳥形)など、多様な形態が用いられ、その後、平安時代後期からは石製の硯へと移り変わりました。硯が発祥した中国では、装飾性

豊かな陶硯の流行とともに、宋代には石製硯が主流となったことです。硯への奥深い志向と探求は、卓越した墨色を得るための磨墨に優れた実用的名硯を見出すとともに、美的宝物として伝わり、水に浸して石紋を味わうなど、鑑賞硯としても愛玩する文人や愛硯家の心血が注がれてきました。由緒に富む古名硯にも衆目が集まります。日本では、部分彫琢はあるものの、一般的には方形や楕円形の実用硯が主流です。各硯面に密立する鋒銛(微粒な鉱物結晶が構成する凹凸)による其々



硯—石材例



宋坑端溪硯



円形陶硯

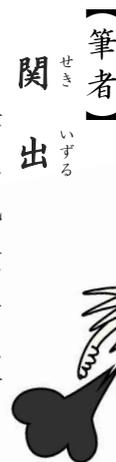
の磨墨実態や、水の硬軟による発墨差の把握などは大変興味深いです。

他方、墨汁を多量に用意する際、硯の役割を担う電動式墨磨り機も製墨会社により考案され、手磨りの墨汁を指した工夫もなされている様子です。また、硯を用いず、あらかじめ調整した墨液(膠や合成樹脂系を使用)も、その簡便さで広く普及しています。

## 令和四年度 記念講演会開催

昨年十一月、駿河半紙技術研究会の総会内において、渡井一信氏による記念講演会が開催されました。演題は「四十五年間 富士宮市文化行政に関わって」でした。渡井氏は富士宮市役所で、文化行政に長年携わり、現在、同市立郷土資料館館長を務めています。渡井氏が考案した『歩く博物館』事業の話は、とても興味深いものでした。

さて、セピア色の顔料にも用いられる烏賊墨(イカスミ)は、烏賊が如何なる硯を用いたのでしょうか。



【筆者】  
関出 せき いずる  
駿河半紙技術研究会員・  
東京藝術大学名誉教授・  
元大学美術館館長  
(2009-2015)

『歩く博物館』とは、文化財を一箇所に集めて展示する従来型の博物館でなく、その文化財が存在する場所を、実際に訪れて体感するとういうものです。この事業に、全国の自治体から視察や、講演の依頼が相次いだそうです。そして、この成功が、後の富士山世界遺産登録推進活動に繋がったそうです。その裏話も大変面白かったです。

駿河半紙技術研究会主催

令和5年度

総会・記念講演会・懇親会のお知らせ

会期 令和5年11月11日(土) 11:00~13:00

会場 富士宮市矢立町737 和風料理「花月」 TEL 0544-23-4141

<http://shizuoka.j47.jp/kagetsu/>

会費 1名 2,000円(税込み)

内容 11:00~11:10 総会

11:10~12:00 記念講演会

講師 佐野 智久氏(学校法人中村学園 静岡福祉医療専門学校教諭・当会員)

仮演題 「エルブ(トルコ)のマーブルリング」との出会い

12:00~13:00 懇親会 美味しい和定食を。

申込方法 郵便振替をご利用頂き、前金制でお願い致します。

00830-7-137 内藤恒雄

申込締切日 令和5年10月20日(金)

内藤恒雄手すき和紙記念館 内藤恒雄

419-0301 静岡県富士宮市上柚野907-1

TEL 0544-66-0738

★★ 令和5年度の年会費1,000円のご入金も忘れずにお願い致します ★★



畑(雨端)石一硯



赤間石一硯



赤間石一硯工房